

● 論説文講評

今回は、①「ニューノーマル」が及ぼしたもの。②未来のオリンピックのあり方は？という2つのテーマから選ぶ形式でした。いずれも、前年に続いて世界中を覆った「新型コロナウイルス」の影響を、どう身近な出来事としてとらえ、それに対して自分らしい考えや意見をまとめるか、という点がポイントです。みなさんにとってはどちらの切り口が書きやすかったでしょうか。

「ニューノーマル」が及ぼしたもの。ここでは、休校や自宅学習の時間が増えたことに伴うさまざまな出来事が、テーマになりました。優秀賞に選ばれた「ポストコロナ社会のニューノーマルとは」は、日々の中学校での生活への影響という体験を元に、「コロナが終わった未来に何がかわるのか」を論じたものです。考える題材として厚生労働省が示した「新しい生活様式の実践例」を取り上げました。こうした具体的な資料は論説の軸になります。実践例の中でも、コロナ後にまで定着するものとしたくないもの、について論じてゆく形で話が進みます。その際にも家庭など身のまわりで起きた出来事を例にしながら、論をまとめてゆく手法は王道ですが、分かりやすい手法です。両親と話をする時間が増えたというのは、コロナが残した良い効果だったと言えるでしょうね。そして、「人間と人間が直接会う価値は変わらず、働き方が変わる」という結論に導きまます。読後感も良い作品でした。

これと違うタイプで目立ったのは「新しい推し」です。「推し」という最近の流行語がタイトルに入るだけで、「何だろう？」と読む人の関心が高まります。テクニックとしては効果的です。内容もいかにも現代の高校生らしく、「YouTube」や「K-POP」などが登場します。「私の周りのニューノーマルは YouTube から好きな芸能人を発掘することだ」という一言は、まさにリモート学習の増加でパソコンやスマホに接する時間が増えた高校生らしい現象です。題材を身のまわりだけでなく、全国の若者として広げた点もよかったですね。ただ、最後を「これらの媒体の力を地球環境問題の意識向上へとつなげては」という提言に導きましたが、そこまでの説明がほとんどなく、かなり強引なまとめ方に感じました。感想文としては二重丸ですが、論説文という形式にはなっていないように思います。もっと書き込んでもよかったですね。

未来のオリンピックのあり方は？こちらは、一年遅れで夏に行われた東京オリンピック（五輪）・パラリンピックの今後についてが、テーマでした。世界中でコロナ感染が続き、日本でも決して鎮静化したというような状況ではなかったにもかかわらず、無観客や入場制限という異例な形での開催となっただけに、そもそもが「問題だらけの」五輪でした。新聞やテレビでも連日、どちらかという問題点ばかりが指摘されていまし

たので、テーマとしては考えやすかった設題だったと思います。その分、似たような内容の作品が多くなりました。その中でどう違いを付けるかが、こうしたテーマでは腕の見せどころです。

優秀賞の「オリンピック、分け合いませんか」は、開催中に感じた「モヤモヤ」を実際に五輪会場で取材を通して目撃した新聞記者の父親と、テレビで観戦した一般の視聴者である自分、という対比を軸に話を進めていった点が、他のとは違う読みやすさにつながったと思います。いわば、プロの視点と素人の実感の差ですね。どちらが上下という話ではありません。問題点や疑問を指摘した後に、提案として「複数の国によるオリンピックの分散開催」を提案します。具体的な案を例示し、それによって経費などの負担が軽減するだけでなく、「持続可能な開発目標 (SDGs)」という、世界の統一目標にもつながるというものです。決して目新しい切り口や意外性はありませんでしたが、きちんとした型にはまった無理のない論文だったと思います。

奨励賞の「東京五輪を地球のレガシーに」も、論考の流れは同じでした。同じく感じた「モヤモヤ」の原因は、経済的、開催都市の運営、環境という「負担」にあって、その危機を乗り越えるために「分散型オリンピック」を提案します。地域、季節という「分散」を行うことで小規模都市でも開催が可能になる。資金不足にはクラウドファンディングを使うなど、具体的な提案を示し、「持続可能な分散型の大会は、地球にとってのレガシーになる」とまとめました。論拠も、論考の進め方もすっきりしていましたが、惜しむらくは、この大会に関する自らの経験や体験が少なかつたため、誰が書いたのかが分からない一般論として受け取られかねなくなった点です。もっと、私の経験、実感を具体的な事例を元に盛り込む工夫があれば、説得力が増したと思います。

その点、ユニークな視点だったのが「グラデーション」でした。あまたある論点の中から「ジェンダー平等」の問題に絞った点は、他の作品にはない「個性」でした。それだけでも、注目されますね。内容的にも今大会に出場したトランスジェンダーの選手の例などを挙げながら、まだまだジェンダー平等に追いついていない現実に対して、「性別が固定化されることで、評価がされにくくなっている」と疑問を投げかけ、「その人の能力や努力そのものをみる目・讃える感性」が重要と説きます。でも、世の中にはまだ「ジェンダー」への反論もあり、一気に進みにくい現実の理由も存在します。反論に触れないで自分に都合のいい材料だけ集めて意見しても、説得力はありません。自分の意見や考えをまとめるだけでいい感想文やエッセイと、論説文の違いはそこです。

ここで取り上げている論説文はもとより、感想文やエッセイであっても、こうしたある種の人物（合格者）を選ぶためのコンテスト（入試、面接のためのエッセイ、採用試

験)などで問われるのは、高度な文章力ではなく、「筆者がどんな人なのか。どんな考えを持っている人なのか」が、いかに分かりやすく書かれているかです。採点する側の人は、作品によって初めてその人と接します。しかもわずか数分間の採点です。その人の人柄が自然と理解できるような具体的な経験と、それによって生まれた視点があることが重要になってきます。その点を、心がけて下さい。